



全国の高等学校から依頼を受け、生徒や保護者、教員などを対象として行っている校内医学部入試セミナー

医学部合格への大きなチャンスはあと2年 合格につながる学習環境を持つ 予備校選択が大きなカギを握る

少子化やコロナ禍、ウクライナ情勢などの社会状況を受けて医学部受験も大きな影響を受けている。年々医学部志願者数が減少し入学しやすい状況が続く一方で、学力低下への危惧から、より高いモチベーションが求められるようになってきている。全国に直営10校舎を展開する医学部受験予備校大手の富士学院・坂本友寛学院長に医学部入試の現状と、今後の見通しについて伺った。



「医師になる」という自覚と覚悟を促すための取り組みのひとつ「ゼミ生自立講座」

受験者が年々減少し 合格しやすい状況に

医学部を目指す受験生の数は、年々減少しています。2022年度も例外ではありません。特に前年度は、コロナ禍がピークのときに入試が行われたため、感染者の多い東京など都市部での受験を控える受験生が多くいた関係で、医学部医学科の受験者数は、国立大学も私立大学もともに減少し、特に私立は大幅に減少しました。2022年度入試では、前年度に比べ東京受験を再開する受験生が多いため、ある程度志願者や受験者が増えるのではないかと予測していましたが、実際には減少傾向に歯止めはかかりませんでした。

私立大学の医学部医学科から見えていきたいと思います。一般選抜および共通テスト利用選抜を合わせた志願者数は9万269人で、前年度より954人減少しており、受験者数は前年度より1338人少ない8万2816人に留まりました。2022年度は、獨協医科大学と金沢医科大学がそれぞれ



富士学院 坂本 友寛 学院長

れ受験日を1日増やしています。私立大学の場合は、志願者数・受験者数ともにのべ人数でカウントしているにも関わらず、受験日が2日間も増え、さらには東京や都市部への受験が復活したにも関わらず、これだけ受験生が減少しているのが現実です。

一方、国立大学の医学部医学科の場合は、前期・後期合わせた志願者数は、2万2340人で前年度より457人増えたものの、受験者数は、前年度より442人少ない1万3220人に減っており、国立大学、私立大学ともに、実質競争倍率は年々減少し続けています。

また今年度入試の特徴として医学部に合格できなかった受験生が浪人をせず、他学部に進学したケースが多くありました。これは、コロナ禍やウクライナ情勢などの先が見えない社会情勢への不安というものもその要因のひとつだと思います。こうした浪人回避の動きは今後ますます、医学部受験生の減少につながっていくことになりそうです。

募集定員が維持される 来年・再来年はチャンス

このような状況を見ると、2023年度入試でも、志願者・受験者数はさらに減少すると考えられます。ですから、来年度の受験生は、今年以上に大きなチャンスがあると思っています。また今後の医学部定員に関する動きも、視野に入れる必要があります。

厚生労働省と文部科学省の分科会「医療従事者の需給に関する検討会」で、医学部定員について人口減少を見据えた議論が交わされています。最終決定はしていないものの、おそらく2024年度までは、大きく定員が削減されることはないと思われていますが、その一方で2025年度以降は、入学定員を絞り込む可能性がります。そうすると、全体の募集定員が減り、競争率・難易度ともに再び上昇に転じることになりそうです。

モチベーションを高める 学習環境が重要に

では、大事なこの1年間は、どのような心構えで取り組めばいいのでしょうか。

学力に関しては、難易度が下がったとはいえ、医学部受験ですから相応の学力が求められます。まず大切なのは、苦手科目・分野の穴をなくすということです。入試で苦手分野が多く出題されれば、たとえ偏差値75の受験生でも不合格になることはありますし、逆にその分野が得意だった場合には、偏差値55の受験生が逆転で合格する場合も医学部受験には

よくあるからです。ただし、医学部に入るまでの学力と、医学部入学後の学力には、関係がないと多くの医学部関係者が口にしていきます。医学部に入るための勉強と、医師になるための勉強はまったく違うということです。つまり、医学部で求められるのは、医学部で勉強し続けられるモチベーションです。だからこそ、すべての医学部入試で面接が課されており、医師になるために様々な覚悟が問われます。

モチベーションを高めるには、学習環境が大きく影響してきます。人は気を抜くとどうしても楽な方へと流されます。流されそうになったときに適切なサポートを受けることができれば、今後に向けての大きなアドバンテージにもなります。とりわけ、医学部専門予備校の場合は、全員が医学部を志望しているため、そのための学習環境が整っているといえます。しかし、一口に医学部専門予備校といっても学習環境には大きな開きがあります。とくに受験者数が減少している現状では、受講生の確保は死活問題です。そのため、受講生確保のために、現実とはかけ離れた謳い文句や、大幅な受講料値引きをアピールしたり、人員削減や給与カットなどで教育の質を落としたりすることで乗り切ろうとするところが出てきています。

根拠のある説明ができる 塾や予備校を選択しよう

では、医学部受験のための塾や予備校は、どのようなポイントで選べばいいのでしょうか。

まずは、実際に足を運んでその予備校の環境を確認したうえで、納得のいく説明を求めることが大切です。とくに重要なのは、塾や予備校が出しているデータを鵜呑みにせず、根拠を確認することです。合格実績に関しても、のべ人数なのか、実数なのかをまず確認すべきです。可能であれば、その年度に何人在籍している、そのうち何人が医学部に合格したの



担任や各科目の講師、職員が生徒ごとにチームを組み連携し、一人ひとりの生徒を支えている

かを聞くといでしょう。医学部専門予備校の場合、医学部に合格させることが使命であり、その大きな責任を担っているわけですから、表に出て合格実績の中心についてはしっかりと確認する必要があります。

指導体制についても、納得できるまで確認してください。富士学院の場合は、各科目の講師からなるチーム指導体制をとっています。なぜなら、医学部入試の場合は、受験生（の科目ごとの能力や特性）と大学（が出題する問題）の相性のようなものがあるからです。配点や出題傾向、難易度などを科目ごとに検討しながら、総合的に相性がいい大学を決め、その対策を行っています。そのため、すべての科目の講師が一つのチームとして機能する必要があります。この時期は、英語を伸ばすために数学の課題を減らすといった生徒に合った総合的な視点での指導が必要だからです。

富士学院では10数年前から、チーム指導のあり方を試行錯誤してきており、7〜8年前からしっかりとチームとしての機能が体制によりやくなりました。ですから、チーム体制についてのどんな細かな質問でも具体的に答えることができます。

また医学部合格を目指すためには、学力面だけではなく、面接試験等で問われる医師になる覚悟が求められます。そのためには医学部合格後を踏まえた指導ができてくるのかも確かめておくべきです。富士学院では医

